

目をこらして (18)



「お母さん！ 今ね、何かが爆発したんだよ。パーンって音がしたの。誰かが何かしたのかなあ。かずほびっくりしちゃった！ まだドキドキしてるよ。」

携帯電話から娘の声がとびだしてきた。

爆発とはただならぬ出来事。「大丈夫？」と聞き返すと

「うん大丈夫。下の方見ておくから（我が家は三階）ね。

また何かあったら電話するね。うん、外には出ないから大丈夫だよ。」

と、まるで事件記者のようにはりきった声で電話を切った。

それっきり電話は鳴ることもなく、私は少し心配しながら

家に帰り、「大変だったね」と娘に話しかけた。

すると、のんびりテレビを見ていた娘からは「あれね、

花火の音だったらしいよ」という答えが返ってきた。もう

すっかり興奮は冷めていた。

*

共働きで子育てをしてきた。朝は私の出勤が早いいため、夫が子どもたちを保育園に送ったり学校へ送り出したりしてきた。朝は、常に危機と隣り合わせだった。





耳をすまして

用意周到とは決して言えない我が家においては、さあ行こうという時になって見つからないものがある、ということがよくあった。

「お母さんに言っておいたのに」と寂しくつぶやく子どもたちと、「もう！」とあせりつつ怒る夫がそこにいた（のんきな私はそのころ電車に乗っている）。

その危機を救ったのが携帯電話だった。

必要性を感じない私と、痛烈に感じる夫と、意見は分かれたけれど持つことにした。

朝、職場へ向かう道でかわいい着信音になる。

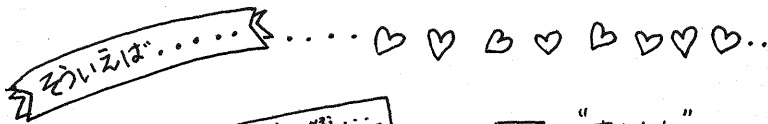
「お母さん、今日ね寒いかな、暑いかなあ」と娘の声。

昼、子どもたちを降園させ職員室に戻ると着信音になる。

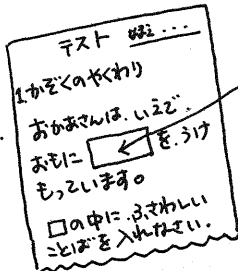
「ねえ、俺の野球の帽子、どこに置いたか分かる？」と息子のかなりあせった声。

ただ声を聞きたいだけの時もあれば、せつぱつまった時もある。「ねえ、お母さん」と呼びかけられる安心感がそこにある。今日もかわいい着信音に耳をすまます。

絵と文 宮里暁美（目黒区立ふどう幼稚園）



長男が
小学校5年生
の頃



この□に“あんしん”
と記入していた。



これはお母さん、
安心な意味で、
て、
ホロリと涙がこぼれた。
まだ、ケタイデシワなんて、なかったこの頃